

NLD圧勝と民主政権への平和的安定的移行の課題 ～No more国軍支配～

ITUCミャンマー事務所・所長 なかじま 中嶋 しげる 滋

「地滑りの」大勝

●新しい時代の幕開けに不安も

ミャンマーの将来を決するといわれた総選挙が11月8日投票で実施され、アウンサンスーチー党首率いるNLD（国民民主連盟）が「地滑りの」大勝を果たしたことは、既に日本でも大きく報道された。国民の民主化実現への熱い思いと国軍支配拒絶の強い意思が示された選挙結果であった。それは、2011年の民政移管が「平服の下の軍服が透けて見える」国軍の実質支配を維持する体制に他ならないことを見抜いていた国民が、その継続を強烈に拒絶したのもでもあった。

NLDの圧勝は、1962年のネウィン将軍によるクーデターで始まり半世紀以上続いた軍事独裁政権に終止符が打たれ民主政権樹立への国民の期待を大きく膨らませ、ミャンマーの新しい時代への幕開けを告げるものだと受け止められている。しかし一方で、その実現への道は平坦ではなく深刻な課題があるとの声も少なくない。必ずしも明るく確定的とはいえない状況も窺える。

●NLD単独で大統領選出可能に

選挙戦は、治安上問題ありとされ実施が見送られた下院の7選挙区を除く491選挙区（民族代表院＝上院168、人民代表院＝下院323）で展開され、NLDが390議席（79.6%）を確保した。それは非選挙軍人議席を含む全議席664の過半数333を大きく超えるもので、NLDは単独での大統領選出・新政権樹立を可能とした。

ちなみに、主要政党の獲得議席は下記の通り。

NLD（国民民主連盟）	390（上院135、下院255）
USDP（連邦連帯発展党）	41（上院11、下院30）
ANP（アラカン国民党）	22（上院10、下院12）
SNLD（シャン国民民主連盟）	15（上院3、下院12）

他の諸政党（総計93党中9党）の獲得議席は上下院合計で5議席以下、無所属当選者は上院2、下院1であった。

●大統領選挙

以上のようにNLDは、合計390/664（上院135/224、下院255/440）と、絶対過半数を確保したのだから、来年1月末に開会される新議会での大統領選挙で自党が推薦する候補者を確実に当選させることができる。しかし、現行憲法の規定（家族に外国籍の者がいる者は大統領就任資格なし）によって今回の大統領選挙は、約80%の議席を獲得し圧勝した党の党首（アウンサンスーチー氏）が大統領に就任できないという民意から遠く離れた大統領選挙となる。

ミャンマーの大統領選挙は、非民主的な資格制限だけでなく極めて奇妙な方法で実施される。まず3つの議員グループ（上院の選挙で選ばれた議員、下院の選挙で選ばれた議員、上下院の非選挙軍人議員）が候補者（議員でなくとも良い）を選び、その3者の中から上下院全議員による投票で第1位の者が大統領に、2、3位の者が副大統領に、選ばれる。今回の選挙結果から、大統領選挙の結果は、大統領と副大統領の1人がNLD推薦の者、他の副大統領が軍人議員推薦の者となるだ

ろう。どんな選挙結果であろうとも、国軍は必ず副大統領の座を確保できる仕組みだ。注目されるのは、軍人議員推薦の副大統領がいかなる人物かだ。国軍の意向を直接反映する立場に立つ副大統領が、NLDを基盤とする正副大統領とどのような政治的関係を築くかは、ミャンマーの民主化の進展具合を左右する重大事だ。

期待される平和的で着実な政権移譲

●90年選挙の経験と消せない疑念

NLD圧勝を無視し圧政を続けた90年選挙後を想起して、国軍への疑念・危惧を抱く国民は少なくない。USDPも国軍も「国民の意思を尊重し、選挙結果を受け入れる」ことを明言したが、国民の不信感は完全には払拭されていないようだ。来年1月末から3月にかけての新議会による大統領選出から新政権樹立までの事態がスムーズに進行することを、多くの国民が期待している。テインセイン大統領はアウンサンスーチーNLD党首に総選挙勝利への祝意を表するとともに選挙結果確定後に政権移行に関する会談の実施を伝えた。国軍最高司令官のミアウンライン上級将軍も同様の態度を示したので、国民の期待に応える対応がとられつつあると思われるが、疑念は残っているようだ。会談は12月2日によりやく実現したが、NLDが掲げ国民が支持した「平服の下の軍服が透けて見える」体制の民主国家への抜本的転換への道は未だ不透明だ。

●テインセインはデクラークになれないか

長年の弾圧に耐え撥ね除けて民主化を勝ち取った先例にネルソン・マンデラ氏率いるANCによる南アのアパルトヘイト撤廃と民主国家建設がある。この時、一方で大きな役割を果たしたのが大統領F・W・デクラーク氏だった。彼は、1990年に27年間の獄中生活からマンデラ氏を解放し、彼が大統領となる1994年の民主的総選挙を実施する道筋をつくった。マンデラ氏とともにノーベル平和

賞を受賞したデクラーク氏はマンデラ大統領の下で副大統領を務め、全民族統合の民主国家建設に貢献した。

テインセイン大統領は、アウンサンスーチー氏の自宅監禁からの解放、今回の総選挙を国際選挙監視団の受け入れなどにより自由・公正選挙として実施、選挙結果尊重と平穏で着実な政権移譲の表明など、実質国軍のコントロール下において、デクラーク氏に似た役割を果たした。もちろんデクラーク氏は軍人ではなく、両氏の間には数々の違いがある。テインセイン氏は軍政時の首相を務めた国軍序列ナンバー4の将軍で、軍政時代の反民主的政策実行に大きな責任を負っている。

しかし、選挙で圧勝したとはいえ、NLDの目前には破壊もしくは越えねばならない大きな壁がいくつもある。まず議会の4分の1を占める軍人議席の存在で、民主化達成に不可避な憲法改正は、この壁の破壊なしには不可能だ。非常事態時の国軍最高司令官による全権掌握もあるし、主要大臣の指名権の問題もある。州・管区首長の任命制や地方議会の軍人議席問題、少数民族との和解とりわけ武装闘争の終結の課題もある。各省の高級官僚は国軍出身者によって占められており、政権の中枢は国軍によってがっちり固められているといえる。

これらの壁を打ち壊しあるいは乗り越えるために、南アの例は参考にならないかと思うのだ。

軍人議員推薦の副大統領が重要で、国軍の意思によるが、テインセイン氏も候補者たりうる存在だ。アウンサンスーチー氏は、マンデラ氏が行ったように、民主的國家建設を安定的に推進するため、協力を要請することはないのであろうか。

南アの1994年選挙に監視団の一員として参加し、ミャンマーの歴史的総選挙を目の当たりにした者の「妄想」かも知れないが、国軍という大きく頑強な壁をもつこの国の民主主義が着実に進展していく道筋を考えると、こうした「妄想」が浮かぶこともある。